

平成28年度第4回郡上市総合教育会議 要録

日 時 平成28年11月28日(月)
開会 15時40分 閉会 17時10分

会 場 郡上市役所 4階委員会室

出席者	郡上市長	日置 敏明
	教育長	石田 誠
	教育長職務代理者	原 初次郎
	委 員	杉本 尚之
	委 員	清水 るみ子
	委 員	水野 秋子

【オブザーバー】

副市長	青木 修
市長公室長	三島 哲也
教育次長	細川 竜弥
商工観光部長	福手 均

【陪 席】

教育委員会学校教育課長	羽土 聡
教育委員会教育総務課長	一柳 芳之
教育委員会教育総務課長補佐	長尾 英行

【事務局】

市長公室次長兼企画課長	置田 優一
市長公室企画課主幹	石田 紀美江

議 事 (1) 郡上市の県立高等学校の望ましいあり方について

市長あいさつ

郡上市の県立高等学校の望ましいあり方について、郡上市としての考え方を早く県教委へ提出したいと思っていたが、課題を抱えている地域の意見について急がなくて良いとのこと。また県議会でもやり取りされているようだが、郡上市としても他の会議報告も頂きながら、もう少し考え方を深めたい。先般の郡上北高校の活性化協議会でも、県教委の課長が「数字的なものから客観的に判断し、統廃合という考え方では必ずしもない」と言われた。しかしながら郡上市内の2校が何もしなくても安泰と言う意味ではない。引き続き知恵を絞りながら要望すべきことは要望して、郡上市総合教育会議の意見は年度内には県へ提出していく。よろしく願います。

教育長あいさつ

5月時点では今秋までに方向を出すかと捉えていたが、それぞれの地域にあった活性化策を徹底的に議論することとなった。グループ1の10校については魅力ある学校づくりを進めており、10月にまとめたリーフレットが各学校へ配布された。その中に郡上北高の紹介やPRもされている。地域と一体的に活動している高校の魅力をさらに広げていくことで、地域の活性化と定員の確保を目指している。高校のあり方についてそれぞれの会議で検討された内容等を、本日報告させていただく。よろしく願います。

【報告事項】

- 中部学院大学スポーツ健康科学科の情報について…………… 教育長より説明
 - ・平成29年度よりスポーツ健康科学部、スポーツ健康科学科を開設
 - ・対象者はスポーツに興味ある高校生（4年間で将来目標を定め、進路決定するための学部）インストラクター等の資格取得を優遇するものではない
 - ・全国を対象に平成29年度は80人を定員とする
- 第2回郡上の高校学校教育の望ましいあり方を考える会について
 - ・資料に基づいて教育長より説明
- 第2回郡上北高校「学校活性化協議会」について…………… 学校教育課長より説明
 - ・郡上北高校の活性化にむけた取り組みの進捗状況について
 - ・平成28年11月12日（土）に文化祭をあわせて開催
 - ・郡上北高校の存続が大前提
 - ・郡上北高校の活性化に向けた取り組みを市内全域に広めてほしい

【議 事】

- 郡上市の県立高等学校の望ましいあり方について－提言－（案）
 - ・修正並びに追加内容について事務局より説明

意見交換

委 員：望ましいあり方について議論を重ねるごとに「2校体制が必要か」「将来的には1校にして良いのではないか」という思いや戸惑いが膨れ上がってきている。本当のところ市民の意見はどうかと考える。

市 長：単位制については正確に理解することが必要。また高等学校の望ましいあり方を、どの程度のスパンで考えるか。子ども数が減っても2校体制が良いかの議論は必要であり、どう見極めるか。2校体制の論点、立脚しているところは何か整理する。

委 員：将来は1校体制になるという思いはあるが、現時点では2校体制が良い。

委 員：この提案で強く要望しながら2校を存続させる。将来的には郡上市立高校をつくってでも2校必要かなど考える。

副市長：もし2校を1校にしてしまうと15歳で他地域へ行ってしまう可能性がある。きちんと

したふるさと意識や誇りを持って生きてくれることを考えると、18歳までは地元で勉強や活動をさせなくてはならない。

もう一つはこれから先、大学の入試制度も変わり少人数でディスカッションをしながら問題を解決する力を問おうとする。現在郡上北高校は40人の学級であっても少人数指導で徹底的に面倒をみており、郡上北高校と郡上高校の2校を1校にして大規模校にするよりは、現郡上北高校の規模であった方が大学入試の面でもより効果的ではないかということ。

もう一つは通学にかかる負担。郡上という広いエリアで本当に高校が1つで良いか。親の経済力や子ども達の負担などの点からも考えなければいけない。

少なくともここ10年は何が何でも2校体制でいかないと、20年先30年先の郡上が危ないと思う。子ども達にとってのふるさとを無くしたくないし、子ども達が帰って来るふるさとが荒れてしまってもいけない。そうしたことを考えると高等学校の役割は非常に大切。

もう一つは学力を小中高一貫して育てること。その中で国際的に対応できるようなICTや外国語を郡上北高校、郡上高校両方と小中高一貫してやってほしい。

最後にふるさと学習も小中高一貫してやってほしい。これだけのことができれば郡上ぐるみで教育体制をつくっていくことの意味が一層はっきりするし、郡上を離れても郡上を忘れない子ができれば「ずっと郡上 もっと郡上」がこれからも可能になってくる。

委員：平成41年には現在の1歳児が269人で2校でも良いのかと思った。どこまでのスパンで考えるかを総合教育会議の場で共有した方が良い。

教育長：平成41年の高校入学が269人の8割と考えると1校で十分足りるが、統合して小さくしていくと100人で認めてくれるような制度ではなく、適正規模で押し切っていくことが進むであろう。特色を出して2校を残していくことを県へアピールしながら推し進めていきたい。

市長：豊かな高校教育が受けられる環境を持ち続ける若しくは作り上げていくことは、今後郡上へ帰って子育てをしながら暮らそうとしている人たちの選択の基準にもなる。当面頑張るという体制をみんなで要請していくことに意味がある。未来永劫という訳にはいかないが、少なくとも10年くらいは郡上の高等学校教育を考えた時にはこうした理解で意見を言うていくことでどうか。

副市長：3年前提言に行った時、県から郡上もデュアルシステムを考えたらどうかと逆提案を受けた。郡上の企業は協力的なので実現の可能性は高い。単位制とどう組み合わせるか、どういうコース設定するかを考える。郡上には大きな提案ができる強みがある。

教育次長：工業科設置での問題は設備費用。企業には最新鋭の設備があり、そこで実習がさせてもらえると工業科的なことが可能となる。企業は郡上の子ども達に地元の企業を知ってもらいたいと思ってみるので実現の可能性は高い。

市長：5ページの機械技能コースの一つの教育システムとしてデュアルシステムを組み立てる。前段と後に出てくるデュアルシステムをもう少し結び付けて組み立てると良い。

委員：機械技能コースの「航空機・・・」の文面について、製造業を限定しなくて良いので

はないか。また、全体的なレイアウトや熱い思いを込めた文面を工夫してほしい。

市長：最終的な提言書を取りまとめるが、新しいことに限定せずさらに魅力をつけていく設定など注文を付けても良いかもしれない。

委員：発達障害の子ども達も支援体制を整えて地元の公立高校に通えるという要望が出せないか。就職を前提としている郡上特別支援学校高等部では大学受験ができない。

副市長：高等学校でも通級指導を認めれば、今まで以上に門戸が広がる。

委員：なぜ2校必要かを3ページなどで強く書いていただくと有り難い。

市長：「なぜ1校ではダメか」の意味をしっかりと伝えることが提言の入り口。体裁や熱い思いを伝えられるようブラッシュアップし、磨き上げる。

教育長職務代理者あいさつ

これで第4回総合教育会議を終わります。お疲れ様でした。

※第5回郡上市総合教育会議は、2月の教育委員会定例会に併せて開催予定。